

『広益俗説弁』における道灌説話の享受と展開

郡 司 加 代

一 はじめに

『広益俗説弁』は井沢長秀（蟠竜）著、正徳五年刊行の雑記・考証である。（『日本古典文学大辞典』全二十巻のさまざまな説話・考証のうち、巻十六「婦女」「棣棠花をもつて蓑なきをしめす女が説」には江戸城を開いた太田道灌の山吹にちなんだ説話があげられている。本論では、この説話が『広益俗説弁』においてどのように享受されているのかについてみていきたい。

棣棠花をもつて蓑なきをしめす女が説

俗説云、太田道灌、狩に出られれるとき、野中にて雨にあひ、土民の家に立よりて蓑をからせられけるに、賤女一人ありけるが、何といふこともなくて、やまぶき一えだ折てもち出、道灌の前に置たり。これは歌に、七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞあやしき、とあるになぞらへ、蓑なきことをこたえたり。いとやさしきさまなり。今按るに、『後拾遺集』云、小倉の家にすみ侍りける比、あめのふりける日、蓑かる人の侍りければ、やまぶきのえだを折てとらせ侍けり。心もえでまかり過て、又の日、やまぶきの

こゝろもえざりしよし、いひおこせて侍りける返事に、兼明親王、七重八重はなはさけどもやまぶきのみひとつだになきぞあやしき。此説をあやまり伝へたるか。たゞし、賤女、兼明親王の歌をおぼえ居て、かく会釈ぬるにや。これにつめて考るに、『続古事談』に、待賢門院、法金剛院つくりて御幸ありけるに、林賢といふ法師、滝のかたはらに札をたてゝ、一首のうたを書たりける、衣にてなづれどつきぬ石のうへによるづ代をへよ滝のしら糸。二条長実これをあざけりて、和せられける、しれものゝよしなしごとをする法師ついに囚獄にいとこそきけ。人々わらひのゝしりやみにけり、とあり。やまぶきをもち出し女も、この法師におなじ。そのふるまひをおもひやるに、おこのものしりがほ、かへつてかたはらいたくこそ。

〔訳〕

俗説にいう、太田道灌が狩に出かけたとき、野中で雨に降られてしまい、その土地の民の家に立ち寄つて蓑を借りようとすると、そこにいた一人の身分の低い女が何も言わずに山吹を一枝折つて持つて出てきて、道灌の前に置いた。これは歌に「七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞあやしき」とあるのになぞらえて、蓑がないことを答

えたのである。とてもやさしいことである。

今考えてみるに、『後拾遺集』には（兼明親王が）小倉の家に住んでいたころ、雨が降っている日に蓑を借りようとする人が訪ねてきたので、山吹の枝を折って持って帰らせた。（蓑を借りようとした人は）なんのことうら分からず通り過ぎて、明くる日に山吹の意味がわからなかったということを言つてよこした返事に、兼明親王は「七重八重はなはさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞあやしき」と歌を詠んだのである。

この説を間違つて伝えたものであろうか。ただし、身分の低い女が兼明親王の歌を覚えていて、このように相手をしたのかもしれない。

これについて考えるに、『続古事談』には待賢門院が仁和寺法金剛院を建立して行幸なさつたときに、林賢という法師が滝のかたわらに札をたてて、「衣にてなづれどつきぬ石のうへによるづ代をへよ滝のしら糸」という一首の歌を書いた。二条長実がこれをあざけつて、「しれもののよしなしごとをする法師ついに囚獄にいるとこそきけ」と答え、人々は笑いののしつた、とある。

山吹を持ってきた女も、この法師と同じである。そのふるまいを考えてみるに、愚かな人の知つたかぶりはかえつて笑止千万なのである。

○通釈

七重八重花はさけども…

七重八重とあでやかに花は咲くけれども、山吹には実の（蓑）一つさえないのがふしぎなことです。あいにくお貸しできる蓑ひとつさえないので。

衣にてなづれどつきぬ…

天人の三鉢の衣でなでもつけない石のような（林賢が造つた）石組の上に、永劫に流れ続けよ、滝の白糸よ。

しれもののよしなしごとを…

馬鹿者のつまらないことをする法師は、とうとう牢屋にいと聞いたよ。

○人物

太田道灌（1432～1486）

室町時代の武将。別に持資の名も伝える。道灌は剃髪後の名。父は太田資清（入道道真）。扇谷上杉定正を補佐して多くの合戦で活躍したが、のち讒せられて相模国糟屋で主の定正に殺された。江戸城を築いたことで有名。

歌人としても知られ、その説話も和歌にまつわるものが多い。

兼明親王（914～987）

平安自体中期、醍醐天皇の皇子。母は藤原淑姫。臣籍に入つて源性を与えられ、大納言をへて左大臣に進むが、貞元二年従兄の藤原頼忠を左大臣にしようとした関白藤原兼通の策謀により親王とされ、二品中務卿におとされた。詩文「菟裘賦」をのこす。

琳賢（1074～1150）

平安時代後期の僧。真言宗。華嚴を学んだのち、高野山で良禪から灌頂をうける。小聖とよばれ、保延五年高野山検校。堂塔を建て、

二 考察

著者蟠竜は、俗説を「七重八重の歌を詠んだのは兼明親王である」という『後拾遺集』を根拠に否定しているが、一方で「賤女、兼明親王の歌をおぼえ居て、かく会釈ぬるにや」とも述べており、俗説は全くの誤りではない可能性を残している。

むしろ、後半で林賢のいかにも立派ぶった和歌が二条長実や人々に嘲られた話を出して「やまぶきをもち出し女も、この法師におなじ」と賤女を揶揄している蟠竜は、「おこのものしりがほ」を批判したかったのではないだろうか。

三 太田道灌と山吹

室町時代の武將太田道灌は歌人としても知られ、その説話も和歌にまつわるものが多いことは人物の項で述べた通りだが、特に有名なものが『広益俗説弁』でも取り上げられている「山吹説話」である。この説話は『和漢三才図絵』(全一〇五卷、正徳二(一七二二)年刊、寺島良安著)から落語「道灌」(江戸中期ごろ成立)に至るまで近世から近代を通して多くの作品に取り上げられており、その変遷を『俗説弁』と比較しながらみていきたい。

まず、「山吹説話」で賤女が詠んだ「ななえやえ」の歌については、『後拾遺和歌集』にその歌がみられる。

①『後拾遺和歌集』

をぐらのいへにすみはべりけるころあめのふりけるひ、みのかる人のはべりければ山ぶきのえたををりてとらせて侍けり、心もえでまかりすぎて又の日山ぶきの心えざりしよいひにおこせて侍けるかへりにいひつかはしける

ななへやはなはさけども山ぶきのみひとつだになきぞあやしき

(『後拾遺和歌集新釈 下巻』)

本歌は『俗説弁』にほぼそのままの形で引用されている。

また、『俗説弁』で待賢門院の御幸に際して林賢が詠んだ歌は『続古事談』にその歌がみられる。

②『続古事談』諸道一二七(第五ノ二)

待賢門院、法金剛院つくりて、始て御幸ありけるに、(中略)琳賢といふ法師、滝の石たてゝ、そのかたはらにふだに書たてたりける。

衣にてなづれどつきぬ石の上に

万代をへよたきのしらいと

人々見て、或は興じ、或は無益なりなどいひあへる程に、二条の帥長実わせられたりける。

しれものゝよしなし事をする法師つゐに人やにあるとこそきけ

人々わらひのゝしりてやみにけり。

（『続古事談』）

『続古事談』も『俗説弁』にほぼそのまま引用されている。道灌の説話は数多くの作品に取り入れられているが、林賢の説話を併記するのは『俗説弁』のみであり、著者蟠竜の意図が見受けられる。

③『俗説弁』以前・同年の道灌「山吹説話」

・『常山紀談』（成立年） 太田持資歌道に志す事

太田左衛門大夫持資は上杉宣政の長臣なり、「鷹狩に出て雨に遭ひ、ある小屋に入りて蓑をからんといふに、わかき女の何とも物をばいはずして、山ぶきの花一枝折りて出しければ、花を求めるに非ずとて怒て帰りしに、是を聞し人のそれは七重八重花はさけども山ぶきのみひとつだになきぞ悲しきといふ古歌のこゝろなるべしといふ、持資おどろきてそれより歌に志をよせけり。」（後略）

（『校訂 常山紀談 全』）

・『和漢三才図絵』 太田入道道灌

（前略）道灌、性剛毅にて常に田獵を好み、未だ倭歌文章を知らず。「或る日鷹を野に放つ。暴雨ふり、蓑笠無し。偶一小家に至り雨具を請ふ。其の家唯だ一婦有り。棗棠の花を折りて道灌が前に進む。道灌、其の意を悟らず。其の隣に往きて雨具を借りて還る。而して人に謂ひて婦が花を呈する所以を問ふ、何んぞや。其の人の曰く、笠蓑無きなり。之れ訳あり。乃ち古歌を以つて其の意を解す。道灌

嘆息して卑婦の爲めに恥を被ることを悔ゆ。是れ自り遊獵を停め、偏に詩歌を学びて、遂に其の家集有り。慕京集と名づく。」（後略）

（『日本庶民生活資料集成』第二十九卷『和漢三才図会（二）』）

・『艶道通鑑』 十七

太田源太道灌は、（略）かつて情もしらぬ勇者なりしが、「或時金澤山に追鳥狩りしけるに、村雨の烈しく、袖の雫もしほりあへぬ程なりしかば、六浦あたりのあやしき家に立よりて、「蓑一つ借らん」と、大なる聲にてわめけど人音なし。しばし軒端に立やすらひしに、内より十七八斗の女の、（略）山吹の花一枝指出して打笑けるに、源太腹立て、「雨具をこそ借さざらめ、何の詠に花を出しけん」とのゝしり帰て、その物語有しに、家来に京家の老武者有けるが申せしは、「それは蓑なしと申事にこそ」と申せしかば、源太「それはいかに」ととはれけるに、「七重八重花は咲とも山吹の、みのひとつだになきぞ悲しき、と申哥の心緒なり。やさしかりける女かな」とほめたるに、不圖おもひより、年比あらゝゝしきふるまひのみにて、情の道もしらざるを悔みて、件女にかたらひより、哥の道は武士のしるべきわざとて、一向に是に心をよせられければ、果は雲の上まで聞えて、題を賜りし哥、其外人の口に残る名哥ども、あまたよみをかれける。（後略）

（『神道大系 論説編』二三『艶道通鑑』）

『俗説弁』以前・同年の「山吹説話」は以上の通りである。『俗説弁』で道灌は何も言わずに不可解なまま帰っているが、『常山紀談』・『艶道通鑑』では女に対して腹を立てているところが興味深い。なお、後述『江戸名所図会』にも同様の描写がみられる。『俗説弁』と同年に成立し

た『艶道通鑑』では道灌はさらに「件の女にかたらひより」とあるが、これは恋愛譚という性格によるものなのだろうか。また、『俗説弁』以外の文献にはすべて「その後道灌が歌の道を志した」との記述があることも注目しておきたい。

※なお、引用中『俗説弁』と類似している記述を「」で、『俗説弁』以外の文献に共通する記述を――、その文献独自とみられる記述を――で示した。（以下同じ）

④『江戸名所図会』山吹の里

高田の馬場より北の方の民家の辺をしか唱ふ。（略）相伝ふ、「太田持資江戸在城の頃、一日戸塚の金川（注：山吹川の旧称）辺に放鷹す。その時携ふる所の鷹それて飛び去りければ、跡を追ひてこゝに來たる時に、急雨頻りなれば傍の農家に入つて蓑を乞ふ。内より小女出で、盛りなる山吹の花を手折りてこれを持資に捧ぐ。されども詞を出さず。持資その意を悟る事を得ずして却つて憤りを含み、家に帰り、近臣に事のありさまを物語す。

中に一人進み出で、云く、これは蓑のなきといへる事ならん、古哥に、

七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞわびしき

かく詠ぜし和哥の心をもて答へ奉りしならんと申しければ、持資深く恥ぢて、のち和哥の道を慕ふと、云々。（この七重八重の和哥は、『後拾遺集』に中務卿兼明親王の詠とす。その言葉書に云く、小倉

の家に住みはべりける頃、雨のふりける日…（略）いひつかはしけるとあり。）

按ずるに、この山吹の里の事は、『和漢三才図会』および『俗説弁』、『艶道通鑑』等の中に出づるといへども、（後略）（『新版 江戸名所図会 中巻』）

このころになると、「山吹説話」も今までの説話をふまえつつ場所などが詳細になってくる。「山吹の里は埼玉県越生町にも伝えられている」（『日本伝奇伝説大事典』）とのことであるが、前述の金澤山（長野県）とは地域が大きく異なっている。「山吹説話」が地域を越えて広まり、定着していった証拠だろう。なお、この『江戸名所図会』における挿絵は落語「道灌」（後述）で取り上げられる絵と同趣向と思われる。

⑤落語「道灌」

「道灌」は江戸中期に成立した落語である。スペースの都合上全文の引用はできないが、（興味のある方は江国滋他編『古典落語大系 2』（三一書房・一九六九）を参照していただきたい）全編に「少女は為に贈る花一枝、少女は云わず花語らず」「足慣らしのために田端の里に狩くらにおいでになった太田道灌持資公だ」などの会話がちりばめられている。また、

「こつちにチヨロチヨロ流れの川があるでしょ、そこへ椎茸が風にあつたような帽子をかぶつてき、虎の皮のももひきをはいてつたつて。こつちに盗人の昼寝みたいな奴がゲンコの上にとんびをとまらせてやる。こつちはおかしいや。洗髪髪の女がね、お盆の

上にライス・カレーをのつけてお辞儀をしてやがら。これはどこの女給だい」

という八つつあんのセリフは、前述の『江戸名所図会』の挿絵「山吹の里」を参考にしたものと思われる。

近世の代表的な俳諧を集めた『俳風柳多留』にも「蓑沓ッ有るとやさしい名ハたゝす」（『俳風柳多留全集 新装版三』「柳多留 二十八篇」）との句が載せられており、道灌の山吹説話は時代やジャンルを越えて享受されてきたことがうかがえる。

四 おわりに

このように、幅広く享受されてきた道灌説話だが、前述したとおり『俗説弁』と比較してみると、『俗説弁』には

- ・ 蓑を借りられなかった道灌の言動が書かれていない。
 - ・ 道灌が歌の道を志すいきさつは全く触れられていない。
- という二点が浮かびあがってくる。

山吹を差し出した女を俗説で「やさしき」と評するにとどめ、後日談の代わりに無関係な林賢の話を挿入していることも考えると、道灌や女を称えたかったのではなく、お得意の皮肉さで「おこのものしりがほ」を批判したかったという蟠竜の意図がより明確になるのではないだろうか。

引用文献

- 『校訂 常山紀談 全』江見水陰校訂 博文館 明三四
『古典落語大系二』江國滋他編 三一書房 一九六九
『新版 江戸名所図会 中巻』鈴木棠三・朝倉治彦校注 角川書店 一九七五
『日本庶民生活史料集成』第二九巻『和漢三才図会（二）』谷川健一編 厚德社 一九八〇
『神道大系 論説編』二三『艷道通鑑』増穂残口著・渡邊國雄校注 神道大系編纂会 一九八〇
『後拾遺和歌集新釈 下巻』犬養廉他編 笠間書院、一九九七
『俳風柳多留全集 新装版三』「柳多留 二十八篇」岡田甫校訂 三省堂 二〇〇〇
『続古事談』播摩光寿他編 おうふう 二〇〇二

参考文献

- 『日本伝奇伝説大事典』乾克己他編 角川書店 一九八六
『日本説話伝説大事典』志村有弘・諏訪春雄編 勉誠出版 二〇〇〇
『新潮日本人名辞典』潮社辞典編集部編 新潮社 一九九一、三
『日本古典文学大辞典』本古典文学大辞典編集委員会編 岩波書店、一九八三、
十